

外国語学習の難点とその克服

——フランス語発音覚書——

高橋 秀雄

Abstract

Les apprenants débutants japonais trouvent le français une langue à trop de connaissances grammaticales à apprendre. S'ils jettent un regard sur les règles élémentaires de la phonétique et l'expression écrite de la langue française, ils pourront surmonter un grand nombre de difficultés de cette langue. Ce présent article, destiné aux débutants japonais, traite principalement de la syllabation du français, inconnue au japonais, leur langue maternelle.

序

愛知大学国際コミュニケーション学部では学生たちは2つの外国語を履修するが、1年次生は前期、春学期（第1セメスター）には実践的な英語のみを集中的に学習し、未修外国語である第2外国語は1年次後期、秋学期（第2セメスター）から学習しはじめる。フランス語を履修する場合を例にとると、学生たちはまず「基礎フランス語」を週3回（1授業時限＝1コマは90分）学ぶ。（言語コミュニケーション学科フランス語専攻生は、これに「フランス語会話入門」が1コマ加わるので週4回となる。）大学での授業は9月半ばから12月末まで3ヵ月間続く。1月に試験が行なわれた後約3ヵ月ほどの休暇期間が入り、授業は2年次春学期の第3セメスターに再開し、4月から7月半ばへと継続される¹⁾。ここでは初歩フランス語の1年間の学習を取り上げ、学習者がよくつまづく個所、とくに発音に関する難点を示し、その克服の要点をいくつか示す。

学習目標、学習時間、学習方法

最初に、学習の目標、学習の条件を設定しておこう。目標は、学習者が1年間でフランス語の基礎的な知識をひとつおりに身につけ、読み、書き、話し、聞く能力を以後独力で伸ばし

てゆけるようにすることである。具体的には、フランス語検定試験3級に合格しうる学力を身につけること、あるいは、はじめて目にするフランス語テキストを聞き手に理解されるように音読できるようになること等が、目安として立てられよう。

この目標を達成するには、どのくらいの時間が要するだろうか。英語をすでに習得している学習者にとっては、1年間の学習期間で、そしてその1年間のうち120ないし150時間継続的に学習する時間を確保することで、十分であろう。120ないし150時間ということでは、週3回の授業を1年間履修すると授業時間だけで120時間を超える。時間量としてはそれだけで十分なはずであるが、実際には、授業に出ているだけでは、目標に到達することはむずかしい。大学での語学の授業の特徴でもあるのだが、この時間は連続して使われているのではない。第2 Semesterと第3 Semesterとの間に2ヵ月以上の中断がある。週3回の授業も、同一の担当者が同一の教材を使用して行なわれているとは限らず²⁾、また3つの授業時間の間に連続性が確保されているわけでもない。外国語の学習でなによりも求められるのは継続性である。大学の授業で使われる120時間を学習者の工夫によって連続させること、そこに外国語学習を成功させるカギがある。私はそこで学習者に、さらに60時間の自発的な学習時間を用意することを要求したい。1年間で60時間、分に直すと3600分、1日あたり10分である。この10分を120時間の授業時間を有機的につなぐために使用してもらおうのである。

この1日10分間に何をするか。授業で勉強したところ、あるいはこれから勉強するところをくりかえし音読あるいは暗誦し、それが自在にそらで言えるようになったら、発音したテキストや会話文をていねいに書き取るのである。この音読、暗誦、書き取りを何度もくりかえすのが主で、テキストを見たり、録音された模範の発音を聞くのはときどきでよい。もうひとつ、発音したテキスト、会話文に出てくる動詞の活用練習を行うことが重要である。たとえば、*Vous parlez français? — Un peu.* 「フランス語を話しますか? 一少し」という会話文を発音したら、*parler* 「話す」の直説法現在を *je parle, tu parles, il parle; nous parlons, vous parlez, ils parlent* というように全人称に活用させて発音し、主語代名詞をつけて書き取る段階を必ず加える。とくに重要であり、またむずかしいのは直説法現在であるが、3ヵ月もこの作業を続けると、フランス語のすべての動詞の活用ができるようになる³⁾。

1. Alphabet / フランス語の音素

フランス語はいくつの音から成っているか、そしてフランス語を表記する文字はどのようなものを使用しているか。最初に文字について、次に音素について、留意すべき点を述べる。

Alphabet

フランス語は英語と同じく、Alphabet [al-fa-be] 26文字を使用している。これらの文字がフランス語ではどう名づけられているかを知るために、そしてフランス語の発音の特徴をつ

かむために、Alphabetを4つのグループに分けてフランス語で読んでみよう。ポイントをいくつか指摘する。

1) A [a], B [be], C [se], D [de], E [ə], F [ef], G [ʒe]

・フランス語には [ei] のような二重母音や [i:] のような長母音がなく、すべて短母音であることを学ぶ。

・G [ʒe] の摩擦音 [ʒ] の音を英語の破擦音 [dʒ] と区別すること。

2) H [af], I [i], J [ʒi], K [ka], L [el], M [ɛm], N [ɛn]

・H [af], J [ʒi] の発音は、それぞれ [as], [zi] にならぬよう注意する必要がある。

・L, M, Nの末尾の子音 [l] [m] [n] は、発音の最後には、音を飲み込まないように、上の唇につけた下唇、上の歯裏につけた舌を離して、子音をはっきりと出すようにすることに注意。

3) O [o], P [pe], Q [ky], R [ɛr], S [ɛs], T [te], U [y]

・Q, Uの円唇前母音 [y] は、音をつくる場所は [i] と同じく口の前方であるが、両唇を引かない。

・Rの [r] は、Lの [l] が舌の先を歯裏にあてて出す側音であるのに対して、奥舌と軟口蓋との振動音。

4) V [ve], W [du-blə-ve], X [iks], Y [i-grɛk], Z [zed]

・Wはdouble V「二重のV」、Yはi grec「ギリシア語のi」の意味。

Alphabetのほかに、フランス語は文字につくつぎのような綴り文字をもっている。

(´)	アクサン・テギュ	é
(˘)	アクサン・グラーフ	à, è, ù
(^)	アクサン・シルコンフレクス	â, ê, î, ô, û
(¨)	トレマ	ë, ï, ü
(,)	セディーユ	ç

フランス語の音素

フランス語で用いられている音の数は、口腔母音12、鼻母音4、半子(母)音3、子音17の計36コである。これをソシュールのすきま (aperture) の分類にしたがって、上から下へ進むにしたがって狭い音から広い音へと⁴⁾、また水平には前方から後方へ進むにしたがって唇音、歯音から喉音へと並べてみると、つぎのようになる。

唇音 歯音 喉音

- 1) p ----- t ----- k (密閉音・無声音)
b ----- d ----- g (密閉音・有声音)
- 2) f ----- s ----- ʃ (摩擦音・無声音)

- v ----- z ----- ʒ (摩擦音・有声音)
- 3) m----- n ----- ŋ (鼻子音)
- 4) l----- r (流音：側面分節／振動分節)
- 5) j----- ɥ ----- w (半子(母)音)
- 6) i----- y ----- u (以下，母音および鼻母音)
- 7) e----- ø ----- o
- 8) ε---œ---ə ----- ɔ
 ɛ---œ̃----- ɔ̃
- 9) a-----ɑ-----ã

1) から 4) ままでが子音，5) が半子音あるいは半母音，6) から 9) ままでが母音である。フランス語の音をこのように並べてみると，つぎのことに気づかされる：

・子音に対して，母音の数が多い。子音は密閉音，摩擦音，鼻子音，流音の 4 種類だけで，複雑なものがない。

・母音は，鼻母音を含めると子音と同じ数くらいあるのだが，そのほとんどが前母音である。

・唇音と歯音の前音が圧倒的に多く，喉音（後音）は，k, g, r, w, u, o, ɔ, ɔ̃, ɑ̃, ɑ の 10 コにすぎない。

・調音において発音器官の周辺を用いる，したがって拡散的な，周辺音がほとんどである。集約的な中心音はほとんどなく，むしろこれを避ける傾向がある。そして周辺音の前音と後音は，高音調性と低音調性の対立によって区別される度合いが高い⁵⁾。ということは，フランス語の発音が基本的に，唇，舌，顎の筋肉を強く使うことを要求していることを示す。具体的には，前音は両唇を強く引くことに，後音は唇を突き出して，舌を下げることに，発音に際して留意する必要があるということである。

2. 発音と表記の関係

フランス語の音声はどのように表記されているか。発音と表記の関係を知る上で確認しておくべきことが 2 つある。

第一に，文字についてフランス語は俗ラテン語の変化した言語だが，その変化は著しく，たとえばラテン語の母音は a, e, i, o, u の 5 個（それぞれ長母音と短母音があるから 10 個とも言える）であったが，フランス語は口腔母音だけで音質の異なる 12 個の音を使うようになった⁶⁾。しかし文字は，ラテン語の文字をそのまま使用している。したがってやりくりをして表記することになる。二重，三重の母音字で単母音を表記する等のルールを知る必要がある。

第二に、耳に入ってくる単位は音素ではなく、音節だということである。テキストを見る時、文字をではなく、音節の切れ目を単位として切って見る習慣をつけないといけない。ただし、以下にフランス語の発音を音節という単位でみてゆくと、その点で発音と表記の関係にはかなり規則的な対応関係がある。

フランス語の母音には二重母音、長母音がないから、すべての音節はかならず1個の単母音を含む。母音をV、子音をCとすると、フランス語の音節の構成はCVが多いが、CVC、CCVC、CVCC、CCVCCもある。音節の切り方はきわめて簡単である⁷⁾。発音される一つ一つの音節がどのように綴られているか、単語のレベル、文のレベルの順に示す。

3. 音節

1) 単語レベル

単音節語 単音節語によって、フランス語の音節の構成をつかむことができる。とくに注意すべき特徴は、母音でおわる開音節構成が多く、子音でおわる閉音節構成は全体の4分の1にすぎないということである。

①開音節構成 (V, CV, CCV, ...)

eau [o] 水 mai [mɛ] 5月 bras [bra] 腕

・母音はすべて単純母音だが、これを複合母音字で表記することが多い。[o] が au あるいは eau で表されるなど、とくに母音の発音と表記の関係を早くつかむことが大切である。

・語末の子音字は発音されないことが多い。

・me, te, le, se, de, que, ce, je, ne等の冠詞、代名詞、前置詞等の文法語詞は、e [ə] が無音となるか、無強勢音節となる⁸⁾。

②閉音節構成 (VC, CVC, CVCC, CCVC, CCVCC, ...)

air [ɛr] 空気 tête [tɛt] 頭 mars [mars] 3月 classe [klas] 教室
prendre [prɑ̃dr] 取る

・語末のeは通常発音されない。ただ、前の子音字の発音を保証する。語末のeは詩や歌のなかでは [ə] として発音されるが、アクセントはもたない(無強勢音節)。

2音節以上の語 フランス語の語には固有のアクセントはない。重要な特徴は、アクセントはかならず最終音節にある(oxytonieと呼ばれる)ということである。2音節以上の語の音節の切り方において、単音節語のところで学んだことがそのまま役立つ。

①母音間に子音が1個あるときは、子音の前で切る: CV+CV...

mai-son [mɛ-zɔ̃] 家 ja-po-nais [ʒa-po-nɛ] 日本の
té-lé-pho-ner [te-le-fo-ne] 電話する

②母音間に子音が2個あるときは、子音間で切る: CVC+CV...

mer-ci [mɛr-si] ありがとう es-car-got [ɛs-kar-go] かたつむり

at-ter-ris-sage [a-tɛ-ri-saʒ] 着陸

・同じ子音がつづくときは、第一の、つまり音節末の子音字は発音されない。

③ただし、子音 (l, r, n を除く) + l, r の 2 子音は切り離さない。

é-cri-ture [e-kri-tyr] 文字 pro-blème [prɔ-blɛm] 問題

④ 3 子音, 4 子音が連続するときは、最後の子音または子音 + l, r 群の前で切る。

obs-tacle [ɔps-takl] 障害 ex-près [ɛks-prɛ] わざと

⑤ e は語末では無音だが、語頭音節では発音される⁹⁾。

me-nu [mɛ-ny] 定食 be-soin [bɛ-zwɛ̃] 必要

⑥語中の e [ə] は、閉音節 (CVC) のあとでは発音され、開音節 (CV) のあとでは無音となる。フランス語では、2つの子音の連続は可能だが、3つの子音が連続することを基本的に許さない。前者では e [ə] を発音することで3子音がつづくことを避け、後者では省略することで1音節 (1拍分) 節約する等、e [ə] が緩衝の役割を果たしている。

ap-par-te-ment [a-par-tɛ-mɑ̃] アパルトマン main-tenant [mɛ̃-tɑ̃] 今

発音と表記の関係で注意すべきことをいくつか付け加えておく。

a) 前母音と後母音のちがいを母音の表記によって知ること。

前母音	／	後母音
si [si], sur [syʀ]	／	sous [su] もし～なら, ~の上に, ~の下に
des [dɛ], deux [dø]	／	cadeau [ka-do] (不定冠詞複数), 2の, 贈り物
neige [nɛʒ], neuf [nœf]	／	Noël [nɔ-ɛl] 雪, 9の, クリスマス
quatre [katʀ]	／	cas [ka] 4の, 場合
parfum [par-fœ̃]	／	profond [prɔ-fɔ̃] 香水, 深い
cinq [sɛ̃k]	／	cent [sɑ̃] 5の, 100の

b) e の表記と発音の関係について

・音節末にあるときは、無音か [ə]

例: souvenir [su-vniʀ] 記憶, venir [vɛ̃-niʀ] 来る

・子音字が続くときは、[e] か [ɛ]

例: les [le] (定冠詞複数), restaurant [ʀɛs-to-rɑ̃] レストラン, mer [mɛʀ] 海¹⁰⁾

Cf. アクサン・テギュ, アクサン・グラヴのついた e について:

é [e]: 開音節が多い。téléphone [te-le-fɔ̃n] 電話, télescope [te-les-kɔp] 望遠鏡

è [ɛ]: 閉音節が多い。Hélène [e-lɛn] エレーヌ(女性名), étrangère [e-trɑ̃-ʒɛʀ] 外国の(女性形)

c) 半子(母)音について

最も狭い3つの母音 [i], [y], [u] は、母音が続くときさらに狭められ、それぞれ半子(母)

音 [j], [ɥ], [w] となる。これらは音節の上では子音の扱いとなり、1音節分節約になる。

[j] bière [bjɛr] ビール, piano [pja-no] ピアノ

[ɥ] nuage [nuʁaʒ] 雲, cuisine [kɥi-zin] 料理

[w] oui [wi] はい (返事), Louisiane [lwi-zjan] ルイジアナ州

・母音の連続を避けるために、半子音が加えられる場合もある：

demi-heure [d(ə)-mi-jœr] 半時間

d) 開音節と閉音節の区別について

開音節と閉音節の差が文法性 (男性/女性) や動詞の人称を区別させるものともなるので、とくに閉音節の末尾の子音を飲み込まぬように発音することが大切である。

grand/grande [grɑ̃/grɑ̃d] 大きな (男性/女性)

heureux/heureuse [œ-rø/œ-røz] 幸福な (男性/女性)

italien/italienne [i-ta-ljɛ̃/i-ta-ljɛn] イタリア人 (男性/女性)¹¹⁾

il part/ils partent [il-par/il-part] 彼は/彼らは出発する¹²⁾

2) 文レベル

フランス語の文は基本的に、名詞グループ (例：冠詞+名詞) と動詞グループ (例：主語人称代名詞+動詞+補語) の2つの語群から成る。発音の上で大切なことは、語群が単語の集まりではなく、音節の集まりである、と考えることである。

— Comme boisson? [kɔm-bwa-sɔ̃]

お飲み物は？

— Qu'est-ce que vous nous recommandez? [kɛs-kə-vu-nu-rə-kɔ-mɑ̃-de]

おすすめは何ですか？

— Nous venons de recevoir un excellent Côtes du Rhône ... [nu-və-nɔ̃-də-r-sə-vwa-rœ-nek-se-lɑ̃-kɔt-dy-rɔn]

上等のコート・デュ・ローヌが入荷したところですが…

この会話テキストの3つの文はいずれもそれぞれ1語群をなし、順に3, 8, 13の音節から成る。これらの音節は、語群の最終音節を除いて、基本的に、同じ長さ・同じ強さで、音節間に休止をおかずに、発音される。最終音節は語の意味とはかかわりなく、位置によって強勢アクセントをもつ。強勢アクセントがあるといっても、それに先立つ音節が平板に連なるのに対してそれは、高めに、少し伸ばして、消えないように発音されるだけである。

語群内では、音節をできるだけ母音でおわる開音節にすることと、音節と音節の間ができるだけ母音同士で連続しないことが、つぎの3つの規則ないし現象によって図られる。

①リエゾン (liaison)：冠詞、人称代名詞、形容詞、前置詞等の語の単独では発音されない子音を、母音ではじまる名詞、動詞等の語がつづくときその母音につけて発音する。

mes amis [me-za-mi] 私の友人たち vous écoutez [vu-ze-ku-te] あなたは聴く

②アンシェヌマン (enchaînement)：単独でも発音されるが、不定冠詞 une, 人称代名詞, 前

置詞、形容詞等の語の語末の子音を、母音ではじまる名詞、動詞等の語がつづくときその母音につけて発音する。

une école [y-ne-kol] 学校 il aime [i-lam] 彼は愛する

③エリズィオン (élision) : 母音ではじまる名詞、動詞等の語がつづくとき、冠詞、人称代名詞、前置詞等の語の語末の母音を省く。綴りの上ではアポストロフ (') で示される。

le avion → l'avion [la-vjɑ̃] 飛行機 la école → l'école [le-kol] 学校

4. 実地練習—音節をとらえる

学習者が実際にフランス語の発音を学ぶために、最後に完結したテキストを一つ提示する。取り上げるのはよく知られた、フランス・ギャルの歌うシャンソン *Poupée de cire, poupée de son*、日本での題名『夢見るシャンソン人形』である。レコードで歌を聴き、また学習者自身が歌ってみることによって、とくに音節の切り方を学んでほしい。ひとつ注意すべきは、歌や詩の場合、1行内の拍数あるいは音節数に応じて無音の e を、ときに [ə] と発音して1音節とし、ときに通常の場合と同じく無音として扱うことである。たとえば、第1行目に *poupée* は2度出てくるが、前につく不定冠詞の *une* が一番目の方は [yn] と1音節に、2番目の方は [y-nə] と2音節に発音されている¹³⁾。

Poupée de cire, poupée de son (France Gall)
 口ウ人形, シャンソン人形
 (paroles et musique par Serge GAINSBOURG)
 詞・曲 セルジュ・ゲンズブール

1. Je suis une poupée de cire, une poupée de son.

わたしは口ウ人形, 音人形。

Mon cœur est gravé dans mes chansons, poupée de cire, poupée de son.

わたしの心は、わたしの歌の中に刻まれている。

Suis-je meilleure, suis-je pire qu'une poupée de salon?

わたしは客間の人形より良いのかしら、悪いのかしら？

Je vois la vie en rose bonbon, poupée de cire, poupée de son.

わたしにはボンボンのようなバラ色の人生が見える。

(Refrain)

Mes disques sont un miroir dans lequel chacun peut me voir.

わたしのレコードは、だれでもわたしを見ることのできる鏡だ。

Je suis partout à la fois, brisée en mille éclats de voix.

わたしは千の声の破片に砕けて、同時にどこにもいる。

2. Autour de moi j'entends rire les poupées de chiffon,

わたしのまわりには、きれいな服を着た人形たちが笑っているのが聞こえる。

celles qui dansent sur mes chansons, poupée de cire, poupée de son.

彼女たちはわたしの歌に合わせて踊っている。

Elles se laissent séduire pour un oui pour un non.

彼女たちはときには「ウイ」と言い、ときには「ノン」と言って、自分を誘わせる。

L'amour n'est pas que dans les chansons, poupée de cire, poupée de son.

恋は歌の中にだけあるというわけではないのだ。

(Refrain)

3. Seule parfois je soupire, je me dis à quoi bon

ひとりぼっちのわたしは時折ためいきをつき、考えるのだ、

chanter ainsi l'amour sans raison, sans rien connaître des garçons.

男の子のことを何も知らずに、わけもなく恋の歌などうたって、なんになるのかしら、って。

Je ne suis qu'une poupée de cire, qu'une poupée de son,

わたしはただのロウ人形、音人形にすぎないのだ、

sous le soleil de mes cheveux blonds, poupée de cire, poupée de son.

ブロンドの髪が太陽の光のように輝いている。

(Coda)

Mais un jour je vivrai mes chansons, poupée de cire, poupée de son,

でもいつか、わたしは自分の歌を生きることになるだろう、

sans craindre la chaleur des garçons, poupée de cire, poupée de son.

男の子たちの熱さを恐れることなく。

注

- 1) 第3セメスター以後のフランス語の履修については、学科により、また専攻言語により、異なる。言語コミュニケーション学科英語専攻の学生にとっては、第3セメスターのフランス語は選択科目となっている。
- 2) 受講者の履修の自由を尊重するなら、それぞれの授業が連続していないことがむしろ求められる、という考え方もできる。
- 3) 下にあげる動詞を、とくに直説法現在に、自由に活用できるようにしておく必要がある。フランス語の動詞はつぎの3つの群に分けることができる。第1群と第2群は規則動詞である。それは新しい動詞をつくる形式をもつという意味で「生産的動詞」とも呼ばれる。フランス語の動詞全体のなかで、第1群動詞が94%、第2群動詞が5%で、この2つの群で99%を占める。第2群動詞の数値が低いのは、この動詞が「～になる、～にする」という生成の意味を含むからである。(rouge「赤い」>rougir「赤くなる」、large「幅広い」>élargir「広げる」) 第3群動詞は不規則動詞、あるいは「非生産的動詞」で、頻繁に使われるのは、下にあげる20個ほどである。
 - 第1群動詞： chanter, danser, aimer, ...
 - 第2群動詞： finir, choisir, obéir, ...
 - 第3群動詞： avoir, être, aller, venir, vouloir, pouvoir, prendre, faire, mettre, devoir, connaître, savoir, dire, lire, écrire, partir, voir, entendre, croire, boire, recevoir, suivre, vivre等。
- 4) フェルディナン・ド・ソシュール『一般言語学講義』(小林英夫訳、岩波書店、改版、1972年)、pp. 65-72 (SAUSSURE, Ferdinand de, *Cours de linguistique générale*, 1916)
- 5) ロマーン・ヤコブソン『一般言語学』(川本茂雄監修、田村すず子、村崎恭子、長嶋善郎、中野

- 直子訳, みすず書房, 1973年), pp. 103-106 (JAKOBSON, Roman, *Essais de linguistique générale*, 1963)
- 6) フランス語は, ラテン語にあった長短の音量の区別を捨て, 音質による短母音の区別のみを取った。
- 7) 書記上と発音上とで, e の扱い等において切り方が異なるが, ここでは発音上の切り方のみを示す。
- 8) e [ə] については後述。語群のおわりにくるときは, アクセント (強勢) をもち, 発音も変わる。
- 例: **Regardez-le.** [rə-gar-de-lə] 彼を見なさい。
- 9) 最終音節にアクセントがあるが, 二番目に強いアクセントをもつのは語頭音節である。
- 10) 第1群動詞等の -ER 動詞の不定法の語尾は [e] (chanter [fã-te]), dessin [de-sê] は「規則通り」であるのに対して, ressentir [r(ə)-sã-tir], dessous [də-su] は, それぞれ sentir, sous に接頭辞 re-, de-をつけた語で, 元の語の s 音を確保するために s を重ねている。
- 11) ここでは, 鼻母音と鼻子音の区別になっていることに注意 (脱鼻母音化)。
- 12) 表記の上では差は明白であるが, 耳に入る音は, 音節末の子音を飲みこまずに出しきらないと聞き取られない。
- 13) このテキストではあらかじめ, 全体が3詩節に, そして各詩節が4行に, 分けて書き出されている。各詩節の4行は, 詩句の切れ目を (/) で分けると, 第1, 3行は7音節 / 6音節, 第2, 4行は9音節 / 8音節で構成されている。前者をA詩行, 後者をB詩行とすると, この4行はABABの構成となっている。詩句の中間の切れ目の音節と詩行の最終音節とに注目すると, A詩行の切れ目の音節だけがすべて -ire であり, B詩行の切れ目の音節とAとBのすべての詩行の最終音節は -on で統一されている。-ire の e は無強勢音節で音節数には入らないが, 詩においては [ə] と発音される。無強勢音節で終わる脚韻は女性韻と呼ばれ, 強勢音節で終わる男性韻と対比的に, 独特の重さの印象を与える。B詩行の後半の半句はつねに *poupée de cire, poupée de son* によってくりかえされ, 人形のゼンマイ仕掛けのギクシャクとした動きを思わせる音楽を支える語句となっている。ルフランの2行は各詩節にはない展開で, いずれも7音節 / 8音節構成 (C詩行) であり, それぞれ半句同士, 1行目が -oir で, 2行目が -oi で, 韻を踏んでいる。詩の意味内容は, 曲の動きもそうだが, 切れ目を境として, 前半が問いかけ (「〜とかけて何と解く?」), 後半が答え (「その心は〜」) となっている。このルフランの各行の前半・後半のやりとりが, 各詩節4行の第1行と第2行の, そして第3行と第4行の, それぞれのやりとりに反映している。コーダは, 第2, 4行と同じB詩行構成をとり, 曲全体をしめくくっている。

以上の分析を参考に, 詩の内容をつかまえながら, 例にならって, 歌詞を音節に切ってみよう。() はリエゾンを, ^ はアンシェヌマンを示す。)

(例) Je-suis-une-pou-pée-de-cire / u-ne-pou-pée-de-son

1 2 3 4 5 6 7 1 2 3 4 5 6

Mon-cœur-est-gra-vé-dans-mes-chan-sons / ...

1 2 3 4 5 6 7 8 9